

昭和三十四年七月二十三日發行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日發行)

(通第一六三號)

37.10.21

池山先生廿五回忌記念号

しみこみ

池山榮吉述

# 慈光

第十四卷

第十號

本稿は昭和五年初夏、名古屋の信道会館での御講話であります。「信道」に本年発表せられましたが、恰も今秋は先生の廿五回忌に当りますので、福田正治様に「慈光」への転載をお願い申し、ここに発表させて頂きます。先生の切々たる願心をお聞きと頂きたいと念じてやみません。

聚 墨 生

甲南高校時代の面影



### 言葉がしみこむ

先月の初め頃でございました、また当館（名古屋、信道会館）へ来てお話をするようにという御申越を受けました。その数日前に——私は時々日記を付けます。私の日記は、日記と云つてもその日の出来事を書くのではない。其日に浮かんだ感想を書き付けるのです。滅多にやりませんが時々やります。——私が例の如くその感想を二つ三つ書きつけて置いた。その中に今日申し上げる「しみこみ」と云う言葉が使つてありましたので、それを題に掲げることにして御返事を申し上げて置きました。今日の話は主にその日記をたどつてお話をしようと思ひます。

ドイツのゲーテと云う詩人が、嘗てこう言つたことがあります。

「私達は言葉と信仰の宗教から、心と行の宗教になつて行くものだ」

と。例えば『歎異抄』の第二章に、

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられま

いらすべしと、よきひとのおゝせをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

とある。それが言葉です。それを信ずるのです。ある時機が到来すると、

「本当にそうだ。私もそう思う」

と、こう信ずるようになる。それが言葉と信仰でございませう。で、この言葉と信仰の宗教から、段々と心と行の宗教になつていくので

「親鸞におきては、ただ念仏して……云々」

ということが、スツカリ心にしみこみ、その言葉が、我が心になると、言葉が心になつたのです。信ずる或刹那に

「大きにそうだ。私もそうとしか思えぬ。私もそう信ずる」

と、こう心が定まつたならば、それからして、今度はそれを土台として、内から信の働きの湧いて来るようになりませう。それが行い（おこな）です。その意味において、私達は、言葉と信仰の宗教から、漸次、心と行の宗教に進んで行くものである。と、こうゲーテが言つたのであります。

これも要するにしみこみです。言葉が深く私達の内にしみこむと、その言葉が即ち私達の心になつてしまふのです。すると、その内から自然に押出されるようになってくるものがある。

先ず第一に、信が徹底するや否や、念仏となつて現れ「南無阿弥陀仏」と唱えずにはおられないようになりませう。その他、私達に気付く事もあります。多くは気付かないのであるけれども、自然多少ともおこないとなつて現れて行くものだと考えられます。

初めは何だか全然違つたものが、二つただ寄り合つているように思われますが、その心が凝つて、信という一念が起りますと同時に、その二つの違つていたものが、まるつきり一つに融け合つてしまふ。一つにもつれ合い、一つに織合わされてしまふ。もう離そうにも離せない同じものになつてしまふ。そうした傾向が、この信仰に於いて、段々と行われつつあるものだらうと思ひます。

例えば、このコップ（演壇上のコップを指して）に酒があるとする。酒と私とは全然別のものであるけれども、この酒をグツと飲み込むと、喉咽元三寸（のどもと）を通過して胃の腑に達する。本来別物であるが、酒は非常にそうした力が強いので、忽ちこの人の身体の中に融け込んでしまふ、漸次酔を催すようになる。咽喉元三寸を通過する頃から漸次はたらきかけ、暫くすると陶然として酔いが廻つて来て、まことに好い心地になります。それからすこし過ぐすと、その人人の性質に応じて、或は怒りつぽくなり、或は泣き上戸、笑い上戸、と云うような者になり、酔眼濛朧とし

て、揚句のはては、華宵の国へ遊び、グツスリと寝込むと云うような現象が起ります。これは要するにしみこみの作用で、信仰もそれに類似した作用であると思えます。

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば  
至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。

と云う御文があります。これは親鸞聖人が『教行信証』の中で、信仰の機微を述べられたもので、如来がしみじみと有難いという、そうした思いを述べられたお言葉です。

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば」と云うことは、先ず皆さんは、一つ大悲の願船に乗らなくてはいけません。大悲の願船に乗る、というは、如来の思召を頂くということです。如来が私共に対して抱いて居られるところの希望、意志、それをわからして頂くと云うこと、それが即ち大悲の願船に乗るということです。

吾々の渴望するところの親鸞聖人にも、或お考えがあつたので、そのお考えをば、自ら欲ばれると共に、どうかして皆さんに伝えるようにしたいと苦心惨憺せられたのが、親鸞聖人の御生涯でありました。この親鸞聖人の、私共に遣したい、伝えたいと言う思召をわからして頂けば、ここに大悲の願船に乗るということになるので、その親鸞聖人の御心の有難さを呑み込まして頂くことになりす。

りますから、私は先ず皆さんにこのことを御注意申上げた  
と思えます。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀たすけられまい  
らすべしと、よきひとのおゝせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

これが、あの偉大なる親鸞聖人の信仰の骨組です。親鸞聖人の信仰を最も簡単に煎じ詰めて現せば、それだけな  
んであります。あれだけのいろいろな著述もあり、またお  
話もなされ、深く／＼研究を積まれ、宗教を解せられたお  
方でありますが、最後の止まるどころ、たよりとなるところ、聖人御自身の力となるところ、聖人御自身の力の湧き出  
る源は何か、即ち、

「親鸞におきては、たゞ念仏して、弥陀にたすけられま  
いらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」  
これだけです。

私は、この言葉を知つたのは、恐らく二十歳前後の頃であつた。またよくこの御文を自分が読んだばかりでなく、  
耳にしたこともあるにも拘らず、どうもそれが心にし  
みこみませんでした。

あの御文は親鸞聖人の信仰の骨格である——と、十分承  
知して居りながら、それは一つの理屈として私というもの

### 踏み切り

さて、大悲の願船にはどうしたら乗れるか、大悲の願船  
が眼の前に浮かんで居つても、それに乗らねば駄目で、自  
分と大悲の願船と別になつて居らず、一つにならねばいけ  
ません。そのことを先ずお話しなければならぬ。これは前々  
回の講話の際に多少お話ししたことではないかと思ひます  
が、一番手つ取り早いところで申し上げましょう。

あの木馬というものがある。この机を見ると、一寸木馬  
を思い出します。学生などが体操をする時に木馬を飛ばさ  
れることがある。向うから駆けて来て、こつちから向うへ  
飛ぶ。どうして飛ぶかというに、どんなに力があり、どん  
な達者な者でも、何等の用意なくして木馬は飛ばません。  
木馬を飛ばすには一つのことがあります。そのこつは、即ち  
踏み切りということでありす。トン／＼と飛んで来て、  
木馬の一、二尺前まで来ると、ポンと踏みきり、その拍子  
に飛ぶので、この踏みきりが大切であります。

如来の御心を本當にわからして頂き、しみじみと如来の  
御心を私の心の底までズツとしみこむようにさせて頂くに  
は、矢張りその踏みきりが必要す。これは私の体験でござ  
います。

私はその踏みきりを『歎異抄』第二章によつてしたので  
ございます。これが一番手つ取り早く、且つ一番直接であ

と別々に列んで居るだけで、「そうだ」と私が、この御文  
と一つに融合してしまい、織合わされてしまい、別けよう  
にも別けられなくなつたのは、もつと／＼後の話です。

それで、踏みきりはどこで私は体験したかというに、私  
は「無常」というよりは「罪悪」と云うような問題に苦し  
み、そうして自分が進むことも退くことも出来ないという  
境地に立つて、本當に自分の心というものは、しようもよ  
うもないものである。それが悪いと知りながら、どうも改  
めることが出来ぬ。こうすればよいと知りながら、これを  
行うことが出来ない。まこと自分の心はわれながらあきれ  
かえる程我儘なもの、おろかものである、悪いものである  
ということが、しみじみと思われる。

「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこの方つね  
に沈み、つねに流転して、出離の縁あることなき身」  
とありますが、まことにその通りだ、曠劫流転の外はな  
い。どうしたつて精神的に善くなる氣遣いはない、益々  
悪くなる一方である。「地獄は一定すみかぞし」とは、こ  
のことを言うな、とつく／＼感ぜられる。こうした時に、  
「本當の信仰でもあつたらなア、本當の信仰が獲たいも  
のだ。どうしたら獲られるだらうなア」

と痛切に感じ、どこかに信仰を求め源が見付からぬか  
と、四方八方に心の眼を向けました。ところが、どうした

とたんであつたか——若い時から多少聴いて心に留めて居つたせい——矢張りしみこんで居つたせいでしよう……フト心に浮かんだのはいまの御文、

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて……」

と云うお言葉でございます。

「親鸞におきては……」——「成程そうか——そうだ」これが踏みきりです。

「親鸞におきては、ただ念仏して……」  
と仰言つた。簡単に明確な話である。成程もう浮かぶ瀬のない、眩劫よりこのかた、罪悪から罪悪へと流転して行くより他に仕方のない私、それを目鬼<sup>めお</sup>けて、投げて下さるところの唯一の綱が念仏である。

「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」  
なるが故に、

「ただ念仏して」

と、善の塊りを投げつけて下されたのが弥陀である。

「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

と、親鸞聖人は仰言つた。聖人に対して、絶対の信頼を捧

げていた私は、

「じゃア、私もそうさせて頂こう」——「じゃア私も」これが踏みきりです。

唯その御文を前に置いて、百万遍繰り返しても、それだけでは駄目です。その御文を頂いて、一口に言えば、その御文を真似させて頂く、それより外ない。

「親鸞におきては……」とあるのを「私におきては……」とする。即ち、

「私におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

と。私はこの御文を三、三度、口に言つたかと思ひますが、そのとたんに、はじめて心から念仏が生まれました。

それまで私は念仏が生まれませんでした。信仰があるように人にも思われ、自分でも何かあるように思っていたのが、どうも念仏だけは出ないので、困つことだと思つていました。が只今の御文を真似させて頂き、

「私におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

と読み直して見ると、念仏が湧く如く、押し出す如く、

「南無阿弥陀仏々々々々々々」

と止めどなく、なだらかな念仏が生まれました。生れてはじめてであります。「これが信仰というものだなア……」とはじめて自分に気がついた。

それが二種深信と言ひ得るならば、その刹那の状況、入信の踏みきりはどこかと言ひに、あの御文を見て、

「じゃア、私も……」

と言う、この一点です。大変これはおかしいようである。が、これは心理的に観察して見ると、大いに理由があります。心理学上から観察すると、成程そうならねばならぬ。その点からもこれを皆さんにお勧めして見たいと思ひます。

### 外的模倣

外的の真似——これがなか／＼馬鹿にならぬ。ドイツの或人の説によりますと「ギリシヤの教育は、それが全く根柢になつてゐる」そうです。

ギリシヤの教育の根柢は模倣を根柢としてゐるので、人間は外に行<sup>おこな</sup>うが如く内に感ずる、外部に或態度を取れば、それに適応する考えが心の中に感ぜられるものである。

さて、或賢人、聖人は大いなる思想を抱いており、また美にして善なる人は、崇高なる感じを抱いてゐる。その偉大なる思想を抱いてゐる賢人、崇高なる感じを抱いてゐる

人は、それを外の形の上に現している。例えば仏像でもそうです。観音さんは観音さんの態度を、お釈迦様はお釈迦様の態度を、阿弥陀仏は阿弥陀仏の態度をしておいでになる。

それと同じように、或はソクラテス、或はプラトン、或はシセロなどの像を見ても、皆それ／＼に然るべき形をあらわしている。首の傾け方、手足の組み方、身体を真っ直<sup>す</sup>にしてゐる、いがめてゐる、前に屈んでゐる、うしろに反つてゐるとか云う風に、なるべくその態度から、その人の人格があらわれるように出来てゐる。彫刻は皆そうです、その人の内にある思いが、外から見えるようにするのでその外を見れば内なる思いを窺<sup>うかが</sup>えるようにするのです。

そういうように彫刻でも絵画でも、内なる思いを外部に露<sup>あ</sup>すことに苦心するものでありまして、こうした傑作を奨励してゐるのでございます。

そうして出来上つた物を飾るなり、或は公園のような所に銅像として建てると、民衆はそれを見て「これが偉大なるソクラテスである、プラトンである、シセロである、成程偉そうな風をしているな」と、青年など思わず知らずその態度を真似るようになる。これが外的模倣です。

皆さん！試みに、プン／＼と怒つてゐる人を御覧なさい。眼をいからし、肩をそばだて、口角に泡を飛ばして

いる人がここにいとすると。そうしてその怒つた人の態度をしばらく真似て御覧なさい。またこれと反対に、下を俯伏うつむいて潜然ひそかにとして涙を流して泣いている人の態度を真似て御覧なさい。またはおかしくて腹を抱えんばかりに「アハハアハハ」と笑っている人の態度を真似て御覧なさい。

試みに真似をなさつたら、知らず識らずの間に、外的の態度を模倣しているうちに、怒れる人と同じ怒りを含み、笑える人と同じおかしみを感じ、泣く人と同じ悲しさを感ぜられると思います。

外的に形式を真似ると、本質に到達する観念を生ずる、そういうことがあり得るのであります。これにもとづいたのがギリシヤの教育でありまして、文芸復興時代（ルネッサンス）は、その傾向をあらわして居りましたが、近年に至り教育の方針が変更して、内心に直接影響する方法を採るようになりました。即ち外的模倣より内的模倣に転じたのであります。

外的模倣の最も顕著な例は、欠伸あくびでありまして、誰か欠伸をすると、「欠伸をしたな」と知つただけで、自然に欠伸が出るようになる、欠伸は非常に感染性の強いものであります。

かくの如く他人の態度が自分に影響するのである。或警

それで親鸞聖人のあのお言葉は、親鸞聖人のお心から出たお言葉でありますから、それを真似すれば、聖人のお心を真似することになります。つまり心波と云うのです。共鳴し、同感するというはたつきがここに生ずる。その意味からいうと「じやア、私も、ただ念仏して……」というは非常に理由があります。

親鸞聖人がわかるということは、どういうことかということ、聖人の御木像や絵姿を仔細に点検することによつて、親鸞聖人がわかるというものではない。あなた方と私共の間に於いてさえそうでしょう。……あなた方がどういうことを感じていられるか、どういうことを思つていられるか、そういうことがわかつてこそ、あなた方がわかるので、頭があり、鼻があり、手足があるということは、それは人間の身体であるということがわかつてただけで、それは本当の人間がわかつたのであるとは言えない。何を感ぜ、如何に感じ、どう思つているかという風に、感ずるとか、思うとか、望むとか、そういつた精神的はたつきを知るのが、その人を知るので、目には見えない。

そうした意味で、目に見えぬ点から言うと、聖人の当時に生れさせた人も、七百年後の今日に生れた者でも同じで、聖人の当時に生れて、聖人と差し向いで居つても聖人は見えません。目に見えるのは人間の形だけで、本当にそ

察官にこういふ話がある。

或事件をとりしらべるのに、どうもこの犯罪者とか容疑者の心行がわからない。彼等は無論なるだけ自分の不利益になることは隠そう／＼とする。それを観破するにはどうしたらよいか、と散々苦勞の揚句、その警察官は仔細にこゝこまかく容疑者の態度を観察して、そうしてその容疑者と同じ態度をつとめて取るようにした。容疑者の歩くように歩き、坐るように坐り、立つように立ち、屈むように屈み、笑うように笑い、顔を擧めるようにしかめるといふ風に、つとめて細かに容疑者の態度を真似していた。そうしている間に、段々と、その容疑者と呼吸が通うようになり「ハハアア、あれはこういうことを思つているな。こういう秘密を抱いているな」と直感するようになった。これは矢張り外的模倣から内的模倣に來たのであります。

### 内的模倣

内的模倣というのは、先方の心に考えているように、こちらの心で考えようとすることで、内的模倣をすれば、先方が考えているように感ずるようになります。それを私は内的模倣と云いますが、もう一つわかりよい言葉でいえば、俱開頭くわいかいとう、或は共感きょうかん、もしくは心波しんぱ、共鳴きやうめいということも出来るのでございます。

の人を知る、本当にその人がわかつたということとは、その人の内なる心が観破せられたのでなくてはならぬ。で、聖人がどうお感じになつたかということがわかつた時、聖人がわかつたのである。

それにはどうしたらよいかと云うに、内的模倣によらなくてはならぬ。内的模倣は、これを「感入」という。もしくは逆に「入感」と言つてもよい。「入感」というのは、自分がその心の中へはいりこんで、そうしてその人の思っていることを感ずる。これが「感入」もしくは「入感」ということであります。

それによつてはじめて人がわかるので、いまあの人は大変われしがつているなと云うことがわかると「うれしい」という点に於いてその人がわかり、有難がつているということがわかれば「有難い」という点に於いてその人がわかつたのであります。「感入」以外にその人を知ると云うことは出来ません。

それから「感入」の条件として、人のわかるのは、自分に何かわかる種がなくてはわかりません。「アハアハ」と笑つている人を見ても、自分におかしさを知つていないと、何のために笑つているかわからぬ。例えば小さい虫むし、蜂はちには、人間が笑うているのはどうして笑うているかわかるまいと思ふ。自分も声を立てて笑うことがあり、おかしいと

いうことをしつてゐる。そうしたために、人が如何におか  
しがつてゐるかということが想像出来るのであります。自  
分に腹が立つという性質があり、経験があると人の腹立つ  
ところを見て「大へん腹を立ててゐるな」と想像が出来  
る。

### 信仰の二重化

そういうようなわけで、我が心を種として、自分にも同  
じような体験があり、それを種として人の心を想像し、酌  
み取るということが「感入」であります。何のことはな  
い、自分がその人の身体の中にはいり、そうしてその人の  
念うことを感ずるので、親鸞聖人にしても、そうしなくて  
はわかりません。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられけま  
いらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて……」  
という言葉が聖人に向ひ合つた心持で感じて空覧なさい。

私の体験を申し上げます。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけまいら  
すべしと、よき人の仰せをこうむりて、信ずるほかに別  
の仔細なきなり。  
念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべら

というその前に、

「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一  
定すみかぞかし」  
のところに、ほぼ自分の体験が要ります。その体験あれば  
こそ、

「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よ  
きひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の予細なき  
なり」の味わいがわかるのです。

「よきひと」というのは、親鸞聖人にして見れば法然上人で  
あります。親鸞聖人は恰も私が聖人を渴仰するが如くに、  
法然上人を渴仰していらつしやつたに違ひない。で、そこ  
に共通の点があるので、古往今来を通じて、唯一絶対の信  
頼を捧ぐる人は、私にとつては親鸞聖人でありまして、親  
鸞聖人の他に誰もいない。私は信前からそうですが、吉水の禅  
房において、親鸞聖人は法然上人に対して、恐らく私が親  
鸞上人に対すると同一の感じを抱かれて居つたことと思ひ  
ます。だから「よきひとの仰せをこうむりて」という言葉  
が出るので、そこに共通共鳴の点があることがうかがわれ  
ます。

親鸞聖人に「地獄一定」の体験があらせられ、「よきひ  
と」の体験があらせられる。

また私に於いても「地獄一定」の体験があり、「よきひ

ん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総しても  
て存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせ  
て、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべから  
ずせうろう。そのゆえは、自余の行をばげみて仏にな  
るべかりける身が、念仏を申して地獄におちてせうらわ  
ばこそ、すかされたてまつりてという後悔もせうらわ  
め、いずれの行もおよび難き身なればとても地獄は一定  
すみかぞかし」

と、この御文を拝読した時、

「いずれの行もおよびきたき身なれば……」——「私も  
そうだ」

と感ぜられます。

聖人の偉大なる体験と、自分のちつぽけな体験とはくら  
べものにはならぬが、かつて善悪問題に行詰り、われなが  
らあきれてゐる私、

「あゝ、これが地獄一定だな……」

と感じて居つた矢先、聖人が矢張り同じことを言うて下さ  
るから、

「ハア、親鸞聖人も同じことを考えて下さる」

ということがわかるので、何か共通の種がないと——大き  
い小さい深い浅いは別として——その感じは起らぬ。

「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし……」

と」の体験がある。

で、何のことはない、聖人はその意味に於いて私の二重  
化であります。人がわかると云うのはそれです。自分の二  
重化なる限りに於いて人がわかるので、それではなくて人は  
わかりません。

それでない限り人の身体や言葉がわかるだけで、人の心  
がわかる——その人の言葉に含まれてゐるところの考えが  
わかるということは、その人が自分の二重化となつた点に  
おいてのみ、はじめてわかるので、

「地獄は一定すみかぞかし」とあれば「ほんにそうだ」  
と思ひ、「よき人の仰せ」と親鸞聖人の仰言することも嘘と  
思わぬ。親鸞聖人の信仰こそ、唯一無二の信仰であると確  
信しているから、その方の口づから出た言葉に一点疑いを  
さしはさむ余地はない。

「私はただ念仏して弥陀にたすけられると、よきひとの  
仰せをうけたまわつて信ずるんだ」

と仰言るから、その仰せを御もつとも絶対信頼して  
「じゃあ、私も——この池山においても左様にして弥陀  
にたすけまいらすべし」

ということに決定して、ここに念仏が出て来るのです。

皆さんのこの中に、若し信仰が本當に頂けた感じの無い  
方があれば、それを是非やつて頂きたい。そうすれば木馬

は飛べます。パツと他力の願船に乗ることが出来るので  
す。

「あゝ、そうであつたか。だのに自分でよくなりたと思  
つた。このまるつきりよくなる力の無いものを哀んで、  
与えられた念仏、この上なくよくなる——考え得らる  
べき最大無限の善の塊りたる仏に成れる——ところ  
の、その念仏して……」  
と承つた時、

「あゝ、そうでしたか——如何にもあなたの仰言る通り、  
そういうたしましょう」

と、こうなるのが、それが踏みきりです。

さて、ここで多少御不審をおこされる方があるかも知れ  
ませんので、一寸申し添えます。「他力の信」から云う  
と、自分が踏みきりをやるのではない。一切万事、信仰は  
まるつきり如米よりの賜である。

「釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

われらが無上の信心を 發起せしめたまいけり」

で、そのままよい。何から何まで信仰は他力の賜、如  
来の廻向であることをわからして頂きますが、それは信後  
の様子で、信ぜられない前、大悲の願船に乗ずるにはどう  
するか、どうしたら念仏が出るようになるか、

「ハアこれが信仰の境地か……」

わかり、そうして真の信仰を頂いて念仏を唱えて行く間  
に、今度は逆に行き、私が聖人の二重化であるような感じ  
を幾分抱かされるようになるのであります。今日はいろいろ  
にお話ししようと思ひますが、すこし話が堅くなりました  
から、しばらく休憩しまして、引続き私の実験を一つお話  
しようと思ひます。

——休憩——

### わが子の死に遇うて

只今までお話ししたことは、幾分自分の経験したことを、  
いろいろに工夫してお話したのでございまして、この頃所  
々でお話する場合も、あそこを或程度まで言いあらわした  
いという苦心のみです。

次に『歎異鈔』第十六章について、ついでにすこし申上  
げておきたいと思ひます。皆さん『歎異鈔』は、どうぞ左  
右に置いて御覧なされることを、お若い方にも、お年寄の方  
にもお勧めしておきます。さてこの『歎異鈔』の第十六章  
は、どうもあそこは説明の致し難いところですよ。——今  
日、題にしましたところの「しみこみ」と云うは、前に申  
上げました如く、日記に書いておいた言葉から出したのは、  
四月二十日前後だつたと思う。なぜかと云うと、去年の四

と感ぜられるよう体験するにはどうしたらよいかという  
に、それは踏みきりをやるのです。いつまでも愚図々と  
考えてばかりいても信仰は得られません。

「すべての疑惑は、断乎たる行のみによつて解決す  
る」

と、カライルは言いました。思索、思弁の如きもの  
みでは信仰に入り切れるものではない。どんなに考えて  
も、考えるだけでは駄目です。

外的の模倣がいい。外的模倣が出来たら、自然に内的模  
倣になるので、内的模倣は、俱開頭であり、同感であり、  
共感である。共に感じてこそはじめて親鸞聖人がわかり、  
聖人の御考え方がわかる。随つて聖人は私の二重化であ  
る。

ところが今度は逆にこう思う。

「私は親鸞聖人の二重化である」

と、これはしみこみが段々しみこんで行くと、いまのよう  
なことが幾分感ぜられます。親鸞聖人は私の二重化ではな  
く、私が親鸞聖人の二重化であることがわかる。つまり聖  
人の心が私の心の底に焼付けられるのです。聖人の心と私  
の心と一つに融け合うたようなもので、それが一つになつ  
て出て来るのであります。

聖人が私の二重化ということがわかると、始めて聖人が

月二十二日に、私の十九になる伴を亡くしまして、それ  
やこれやの事を思つて、その感想を書きつけて置いたので、  
その十九になる子供の死んだことに因んで「しみこみ」と  
云う言葉が感ぜられたそれなんです、そのことをザツとお  
話して置きます。

この十九になる子供が死んだ時、坊さんが来て呉れまし  
たが、その坊さんは、且て私が東京に居つた時分に、私の  
家の書生になつていた人で、今は或寺の住職になつて居り  
ますが、葬式万端はその人が世話してやつて呉れました。  
さて、戒名をつけると云う時に、私が先生だもんですか  
ら、「先生、戒名はどうつけましょうネ」と訊かれた。  
「それは、あんたつけて置いて下さい」「一寸心に浮かび  
ませんから、先生つけて下さい」と言われる。

ところが、私の家の床の間に、近角常観師の書いて呉れ  
られた軸が掛けてある。それは、

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、  
至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を

破し、速かに無量光明土に到る……

と書いてあるので、その子供は自分の家で死んだのではな  
いが、家の床の間に掛けてあるこの御文を思い出し、死ん  
で行つた有様と思ひ合せて「至徳院即破居士」という戒  
名を私が選びました。「至徳院即破」というのは、言葉とし

ては意味をなしませぬが、如何にも往生の様子が「至徳院即破居士」という文字によく当てはまるので、これを戒名としたのでございます。

私は、去年（昭和四年）の四月一日から、大谷大学に職を奉ずることになりましたが、それまでは阪神の住吉に甲南高等学校というのがあり、そのの教授に任ぜられて居りました。その十九になる男の子も、その学校の二年生だった。非常に丈夫な質で、どこと云つて平生悪いところも無かつたんですが、私が或日のこと——四月十八日頃だつたと思う——京都から住吉へ行き、私の総領娘が嫁いで居る家へ行つて一晩泊つたことがある。その子はそこに預けてありました。その時、その子供の様子を見ると顔が腫れぼつたので、

「何だか顔がむくんでいるではないか……速く医者に診て貰つた方がよからう」

と注意しましたので、直ぐ医者に診て貰いましたところ、これは急性腎臓炎だから絶対安静を要する、家に静かに寝込んで居つたがよいと云うことでしたから、静かに寝込んで居ることになりました。

私はその晩はそこに泊らず、他所に泊りました。すると、翌朝私の知つている人が、あたふた私を訪ねて来て——私の俵は幸吉と申しますが「幸ちやんが大へんお悪うござ

「私は、これで死ぬるんだ。いまさら死ぬとは思わなかつた」

実に意外だと驚きはてている、が併し、それを怖しがり、なげき、悲しんで居るか云うと、そう云う素振り（そぶり）は無く実に静かに死んで行きました。

世間ではあゝいう死方を見ると実に大往生だという。禅宗の悟りでも開いている人が死んで行く時には、あんな往生をするのかと想えるような、平然自若たる往生には、われながら驚いてしまいました。親族、故旧など見舞に来て集つている人に、一々暇乞（いとまご）をし握手をして、夫々の人に向いまして、

「いろ／＼お世話様になりましたが……どうか御機嫌よろしう……」

と、涙一滴こぼさない、どうも不思議です。私や兄やなどに向つて、こう述べました。

「私は人間として尽すべきことは尽して来ました」

と。この子は小さい時から、幾分この真宗の教を知つて居るので御座います。その筈で、私の家では、母の命日とか、父の命日とか、また兄弟の命日とか、そういう命日には、家中寄つて『歎異鈔』を読みます。私は誰にも強制はしません、私が読もうとすると、皆喜んで一緒に読みます。その子なども十か十一になり、仮名が拾い読みの出来

います、直ぐ来て下さい」と云われるので、早速私が行つて見ると、僅か一夜の間に非常な変化がありましたので私も驚きました。

医者が今朝来て診て、余程これは重態だから、早速お父さんに来て貰わなくてはいかぬと云うことだつたので、それから刻々に容態が重くなつて、僅か四日の思いで死んでしまつたのです。手は十分に尽しました。私が岡山の高等学校に奉職して居つた時代に教えた学生で、今医学博士になつている人が、京阪地方に四、五人もありますので、その中の一人に診て貰いたいと頼みましたところ、五人も博士が寄つて来て、いろ／＼相談して手を尽してくれ、兄の血まで採つて、輸血まで試みてくれましたが、遂に効を奏せずして死んでしまいました。

さて、奇体なことには、その死んだ子は、翌日私が行つた時には、もう死ということを目覚して居りました。それは手とか足とかが段々痺れるようになったから、こうして身体が死んで行くんだ、その麻痺（しび）がいよ／＼上まで昇りつめて来たなら、それでお了（おしま）いと自覚したんでしよう。

このように自分は死ぬるんだと云うことを知つて居つたが、それじゃ、その死を歎き、悲しみ、非常に苦しんでいるかという、そう云う風は更けない。極めて平然自若たるものです。兄や私の居る席で言いました。

頃から『歎異鈔』を初めから終いまで喜んで読んだ。それから私の書いた本なども無論読み得るから読んだに違いない。私が時々信仰の話などすることがあると、どうかするとそんな席へ加わり、十四五の小つぽけな姿をしてうしろにチャンとかしこまつて聴いて居ることもあつた。が、その聴き方が如何にもしみじみと聴いて居るような風でした。それで真宗の組立はほほわかつて居つたろうと思つた。併し高等学校程度の教育を受けるようになってから、思想的にすこし宗教を無視する、拒否する、蔑視すると云うような、反宗教的思想を抱くに至つた。

奇体なものです。それでも習慣というのか、情緒というのか、情操の然らしむるところでも申しませうか、誰かの命日を、どうかしてヒョット忘れて居りますと、

「お父さん、今日はお経を読む日ではありませんか」

「あゝ、そうだつた、読もうか」「読みませう」と、反宗教的思想を抱くようになったにかかわらず、私が命日に『歎異鈔』を読むことを忘れて居りますと、催促までして一緒に読むと云う風で、そうしたことが、いまま如何にも落着いて死んで行つたことに関係があると、私は深く感じたのであります。

こういうのを、世間では大往生と云う。禅宗のお悟りを開くと、死を見ること帰するが如く、何の怖れもなく本家

へ帰るような気持で死んで行けるか知れぬ。丁度そうしたような往生の様子でありました。

が、私はそれだけでは満足出来ぬ。それでは私と本当の心の連鎖が出来て居らぬ——前に言つた意味の入感が出来て居りません、心波が成立つて居りません。私の心の中に伴せがれが生きていない、だから、それでは満足が出来ぬのでございませぬ。私の心の中に伴せがれが生きて居りませんから、無論親鸞聖人の心の中にも生きて居りませぬ。

で、どうも満足出来ぬ。「私は人間として為すべきことは尽して来ました」——と云うのは、単なる人間として、社会の一員として、社会生活を送る上に於いて、私の年輩相応にやつてきた、この点は遺憾はないと云うのです。それだけでは私は満足出来ぬ。

ところで

「私はもう人間は終るのです。これから私は念仏です」と云う。妙なことを云います。「これから念仏です」と云つて「南無阿彌陀仏、々々々々々々」と唱え出した。

伴は念仏というようなもの、恐らく今迄自発的には一辺も唱えたことは無かろうと思ひます。なのに、その念仏の唱え方は、もう十年も唱え癖のあるような唱え方です。私は年が寄つても、未だあんなならかな念仏は唱えられませぬ。如何にも自然的で、如何にも穩おだやかで、心底から

で、その時に、無明の闇を破したのでありますから「即破」という文字を選んで即ちその子供に「至徳院即破居士」という戒名をつけたのでございます。

さて、死んだお伽の晩でした。心安い人々が私の家へお伽きさに来て呉れられました。私の心安い人は多くは信仰の気分のある人で、近い所からも、遠い所からも見えました。その晩、私は幸吉の死に就いて深く感じたことがありました。なので、感想をそれらの人々に述べました。それは、

「幸吉には信仰など無論ないと思つて居つたのみならず反宗教的気分さえ抱いて居つた彼が、忽ちあの念仏を頂いたのは実に不思議だ、矢張りしみこみだな」と、こう私が言いました。

「つまりそれは小さい時から『歎異鈔』を読み、私の話を聴き、私の書いた本を読み／＼して居つたので、信仰の内容がわかっている。その時に、それが段々しみこんで居つたんで、どどのつまりになつて、内から出て来たはたらきである。誰も注入したのではない。私は、お前死んで行くなら念仏を唱えよ、信仰なき、などとは言いません。全く内から自然に湧いて出た念仏で、本当にこれがしみこみです」

とつけ加えた。

ところがその側に、始終「寮のおばあさん／＼」と呼

湧き出すような唱え方でございます。

そこで私は「これはツ……」と考えました。そうしてその伴に向つて云いました。

「お前は大きいな、またお前は正直だな、お前は真実を愛したな……そうして念仏を唱えてくれたのは、私にとつて本当に嬉しい。私もこの先いつまで生きることやわかりやあせん。お前が先へ往つて居れば、私もやがてあとから往く。私が往く時には、お前が死んだお母さんやら、お祖母さんやらと一緒に連立つて、お前が真つ先へ立つて迎いに来ておくれよ。お前が死ぬとまた家中寄つてお前の命日には『歎異鈔』を読むことになるんだネ……」

「そうです」

と応えて、そうして来る人毎に、それぞれ暇いとま乞ををして逝きました。その有様が、如何にも「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風静かにして……」という、あの「至徳の風静かにして」という趣でありましたから「至徳」と云う文字を選んで「至徳」とし、また今迄真宗の話を聴いたり、本を読んだりして、教義の内容は知つていましたが、信ぜられなかつた。ところが、急に死と云うものに直面して「これから念仏だ」と阿彌陀様と差向いになつたような心持で、その信の一念により、直ぐその場

んでいる人が居られた。おばあさん、という年寄のようでありますが、今年三十七になる人で、甲南高等学校に甲南寮という寄宿舎があります。その寮を一時私が預かることになつたので、その寮を世話する人が必要である。ところがさいわい私とその婦人を知つて居りましたので、その人に世話して貰うようになつた。で、その人を「寮のおばあさん」と呼ぶのです。この婦人は信仰のあついで、いまの私の言葉を耳に挟はさんだけれども、

「先生は妙なことを言う。しみこみなんかと云うことがあるか知らん」

と思つて寮へ歸つて行つた。それから寝しなに寮の片付けものでもした後でしよう。寮の傍に花園がある、そこへ何かの水をダート流して寝た。翌朝フトその花園へ出て見ると、多くの花の中に他の花に較べて如何にも生き／＼と咲いている花が一株ある。別にその一株だけが勢いが良いので、どういふものか知らんと思つて考えて見ると、昨晩水をかけて寝たから、そのためだと云うことが分つた。そこで「ハアーン、これがしみこみだな！」と云うことが合点出来た。

それからその花を剪きつて持つて来て

「先生、本当にしみこみと云うことが分かりました。あれがしみこみですなア。昨晩、花畑に水を流して寝ました

が、その水がしみこんだんでしよう。この水を流した一株の花だけ特に綺麗に咲きました。これを幸吉さんに供えて下さい」

と云い「しみこみ、しみこみ」と言うて喜んだ。そうしたことがありました。これがしみこみです。幸吉も矢張り、それは小さい時のしみこみで、いざと云う時になつて、それがあらわれ、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、」  
となだらかな念仏を唱えつつ死んで行つたのである、と。  
私はそう思います。

### 衆禍の波転す

次に申上げて置きたいことは、  
至徳の風静かに、衆禍の波転す。  
ということですが。

これは前の御文の中の言葉ですが、如来の御恩の深重なることを思い念仏を唱える——如来というは、私は、至善の具体化したものと見る——と至善の徳風が光明土から涼やかに吹いてくる、それが信仰です。

風荒くして波高き浮世を渡るにあたり、吾々はこの信仰をもつて居れば「至徳の風静かに、衆禍の波転す」で、禍転じて幸いとなり、悪は転じて善となると云う風に、「至

徳の風……」の言葉は分ります。

然し「あゝそういうものか」と早合点しても、それは分つたのではない。諸々の禍は転じて福となる、諸々の悪は転じて善となるということは「大きにそうだ」と、実感で行かなくてはなりません。

お互人間はどんな災難に遭うか知れぬ。現にやり切れぬ苦勞をもつている人もあります。現に苦勞は無くてもいつどんな目に遭うかも知れません。そういう禍が、念仏を唱えると転ずると云うことになる、念仏を唱える意義は福德円満を招く手段の如く見える。然し念仏は決して福德円満を求むる手段ではない。もとより凡夫のならないなれば、憂きことは、この先々だけだけあるか分らない。その中に立つて一つの頼みとなるものが念仏で、これからどれ程高い険しい山を幾つ越えて行かねばならぬか知れぬ。この私達にとつて、一つの息杖となつて貰うのが念仏であるから、衆禍の波転ずるのでなく、衆禍の波があるが故に念仏が必要である。

然るに、転ずるとはどういうものか、言葉としては分るが体験として分りません。前に申しましたように近角常観師が私に書いてくれた御文、

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かみぬれば、  
至徳の風静かにして、衆禍の波転す。即ち無明の

### 闇を破し……云々。

とある「衆禍の波転す」と云う言葉がどうしても分りません。如何にも念仏の功德を広告的に述べたような文句で、大悲の願船から至徳の風静か、までの文句は分りますが「衆禍の波転す」という文句は私にわからなかつたのであります。

ところが、それがボンとわかりました。  
それは、十三年前に亡くなつた私の家内の死でわかりました。今年五月二十三日が丁度十三年に当ります。先の十九になる俵は四月二十三日に亡くなりましたから、同じ日であります。

家内の亡くなつた時には、私共は岡山に暮していました。家内は日頃非常に丈夫な質でありましたが、その頃、最近二三ヶ月の間どうも身体がすぐれず、殊にグン／＼痩せが目立つ、風呂へでも遣入ると、自分ながら股のあたりの細つたのに驚いて、どうしたことだろうと、かかりつけの医者にも診て貰い、服薬をしてもどうも治らぬので、遂々しまいには病院へ行つて診て貰うことになりました。或日のこと、病院へ行きました。

私は学校から帰つて来た、恐らく午後二、三時頃でありましたろう……玄関まで帰ると、その時分長男が高等学校の生徒でありましたが、いつになく飛んで出て来て、玄関

の障子をガラリと開けて、声をひそめ、

「お父さん大変です。お母さんが胃痛です」

と眼に涙を浮めて、唇をふるわして言いました。私は吃驚しました。

「ウム、そうか、胃痛だつて」

と言つたがり、ウンともスウとも言えない。それから私が玄関から中の間を通り、座敷へ行くと、次の間の襖を開けて静かに家内が出て来ました。

見るとニッコリ笑つている。ニッコリ笑つてはいるが眼には涙がある。

「いよ／＼お望み通り畳が新しくなりますよ」

と冗談を言つた。こちらではどうか知りませんが、東京辺ではよく言うことで「女房と畳は新しい方がよい」と云う、その言葉を採つて「いよ／＼お望み通り畳が新しくなりますよ」つまり、私は胃痛で死んで行く、そうすると後添が来るから、所謂畳が新しくなるというので、冗談ですが、私はウンともスウとも言えぬ。眼から涙は出ませんが頬りにハナが出る。

「今日は風邪を引いたのか知らんがハナが出る」

と云うと、家内はニッコリ笑つて、

「ハナじゃありません、涙でしょう」

と言いましたが、眼から涙が出ず、鼻から涙が出ると云う

ことを、あの時私ははじめて知りました。(笑声)  
それから、家内が

「今日、御信心を頂きましたよ、喜んで下さい……。  
今日病院へ行きまして診て貰いましたところ、医者が丁寧  
に診察して下さいました。この胃のところは塊りがあり  
ますが、これはどうしたんでしよう、と私が訊くと、  
サア、それが問題ですと、大変心配そうな顔をしていろ  
いろとして診て下さった」

と云うのです。無論、医者は胃癌ということが診察の結果  
わかつても、本人に胃癌などとは申しませんが、医者  
のそういう態度で、これは「胃癌だな」と自分に直感したん  
です。

女の直感はずるどいと云うが、直感をした。そのとたん  
に、自分は腰掛けて居つたが、ズツと真つ闇い深い所、  
奈落の底とても言おうか、そうした所へ落ち込んで行くよ  
うな気がしたと言うのです。

「私は胃癌ならとても助からぬ。それを知りました時の  
失望は何とも言いようがありませんでした。八十六のお  
母さんや又里の母も七十余の老人なのにあとに残し、五  
人の子供のあと／＼の始末や、あなたがこれからどんな  
に御不自由なさるかと思いましたが、全く上気してしま  
いそうでした。」

なり、泰然自若として、車にも乗らず、スタ／＼と家へ販  
つたと云うのであります。

それから、胃癌とわかつてから凡そ半年ばかり生きて居  
りました。四ヶ月位は床にも就かず、最後の一ヶ月半ばか  
り寝んで居りましたが、その間も、私と共に読んだのは  
『歎異鈔』でございます。

その当時は母も生きて居りましたので、総領の倅などと  
一緒に、その席に列したことがありました。家内は特に、  
『歎異鈔』を有難がりしましたが、その外に私の好きな御和  
讃を二三十首ばかり書き取つてあつたが、それも読んで喜  
んで居りました。

如来のお慈悲を頂くことが出来、病床について居ながら  
しみ／＼と喜ばして頂くことが出来たということは、本当  
に仕合せであつたと思います。

三十幾つになる年輩の人妻であつて、幼い子供もある。  
胃癌と云えば、然も可成りすゝんでいて当時絶対に助から  
ないという位であるから、死刑の宣告を受けたも同じこと  
で、ここ半年か、三ヶ月かの後には必然的に死んで行かね  
ばならぬことは明瞭で、これ程世の中に悲惨なことはな  
い。——これ以上悲惨な事を考え得られない位の悲惨な事  
にもかかわらず、私共夫妻の間には、何とも言えない喜び  
がある。

けれど、どうぞ御安心なさつて下さい。この刹那の非常  
の失望と同時にハツと如来のお慈悲と言うことに心づい  
て、ア、もうなつかしいと申したところで一緒に暮せる  
ものではなし、もう手をひいて下さる如来様にお任せす  
ほどの切なさかスツと開けました。すると、その時、  
これが私であつてあなたでなくてよかつたと思いかえさ  
れて、どこ／＼までも見捨てぬ如来のお慈悲ということ  
が感ぜられますと、それと同時に、ズウーとエレベエ  
ターで奈落の底から浮かみ揚つて来るように、元へ帰つ  
たような気持になりました。

若しこれがあなたであれば、子供を抱えてこれから先  
どんな悲惨な生活をしなければならぬか知れないのに、  
このして見ようのない者を見捨てぬのが如来のお慈悲で  
ある。あ、有難いことだ。他力の悲願はかくの如き我等  
がためなりけり、……と、この時ピタリと受取ることが  
出来ました。」

これが臨終ではないか。臨終の時がいよ／＼迫つて来た  
と思う時、どうしても信心を頂かねばならぬと考えた刹那に  
本当に如来のお慈悲の尊さが味わわれ「他力の悲願は、  
かくの如きの我等がためなり」と知られて、心に深く深く  
焼付けられた。すると、奈落の底から浮かび揚つた心持に

私も幸い、その数年前、私の四十二歳の時、いまの、

「親鸞におきては、ただ念仏して……」

という、あの御文で信仰の体験を得させて頂き、お念仏が  
出るようになっていゝ。ところへもつて来て、また家内が  
病が縁となつて

「他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけり」  
と深く心に焼きつけられ、同じ信仰を頂いて、浄土に通す  
る白道を、夫婦手をたずさえて

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、々々々々々々」  
と、お念仏を唱えながら歩んで行く身とならせて頂いたと  
いうことは、何と云う恵まれたことであらう……死して  
行く身は、後や先、俱会一処は疑われぬ。

かりそめの病が縁となつて弥陀の心のうちに生れさせて  
頂き、夫婦永遠の契を結ぶことが出来たと思えば、この  
上もない悲惨な事を眼の前に控えながらも、喜ばずには居  
られません。

「今生、夢のうちのちぎりをしるべとして、来世さとり  
の前のえにしを結ばんとなり。云々」

という御文がありますが、まことに、吾々夫婦は、その  
御文をそのまま実現して居ります。

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、  
至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。」

この上もない人世の禍が、一転して、この上もない人生の仕合せになりました。衆禍の波そのままではありません。これを転ずるので爾来いろ／＼な事に出くわせますが、大抵はそう云う風に頂きますと、どんな禍も転じて行きます。それが「即破無明闇」で、無明の闇を破るということでございます。

### しみこみ

それで、このしみこみという上に於いては、今日『歎異鈔』の第九章と、第十六章についてお話ししようと思いません。が、とてもそれは話し切れない。一口に言うると、信仰のしみこみは、消極的と積極的と相互交代するのでございます。第九章は消極的であつて、信心は頂いてはいる、念仏を唱えているが、大して喜ばれぬ。こんなことでいいか知らんと思われる。それであればこそ如来が私共を見捨てられないと云うので、「そうでしたか、恐れ入りました」とこの頭が下つて「こんな愚図々々したことでは実に相済みません」と念仏を唱えて、心自ら聖人の心に引寄せられるのが第十六章であります。

かように消極的と積極的と交代するのが信仰の生活であると思ひます。併しその関係はむづかしい。自ら親鸞聖人の心の中へ飛び込んだように感ずると云うことは、甚だ難

儀なことでありますから、それは今日は略してしまい、聖人はどういふ風に、そのしみこみの生活をしていられたかと云うことを考えて見たいと思ひます。

しみこみの過程は、信の一念から、この世の息が絶えるまで、益々深くしみこんで行くものである、と私は考えます。その意味に於いて、「言葉と信仰の宗教が、心と行の宗教になる」ので、弥陀の言葉が私の心に焼きつけられると、そのことを思いながら、或おこないをして行けるようになる。その意味におけるしみこみは、この世の息がとまるまでやまりません。そのしみこみの過程の最もよくあらわれている言葉が『歎異鈔』の中にあります。その言葉は、聖人が始終くり返して居られた言葉で「南無阿彌陀仏」と唱えられる下から、独語のように、或は、他人に言いきかすように言われた言葉であります。それは、  
「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」  
ここにしみこみの過程が現われて居ります。これは信の一念の刹那から、臨終の際の息を引き取るまで、しみこみの過程を發表されている言葉であると思ひます。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられま

いらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほか  
に別の子細なきなり」

と信ぜられたらどうなるかと云うに、信ぜられたら念仏が出る。それは私共と同じことと思ふ。

「あゝ、そうでしたかな」

と念仏がその時出た。その念仏を翻譯すると、いまのお言葉になるので、本当に信仰が心に焼きつけられると、あの御文が心から湧き出て来なければならぬ。実に名文です。

### 信仰の綱引

私は、信仰は綱引であるとしてよく申し上げます。如来と吾々の綱引であります。如来は非常な力で、吾々を如来の手元へ引寄せようとして引つ張つて居られますのに、吾々は強情我慢のありつたけの力を出し、引つ込まれまいとして頑として対抗している。

ところが、地獄一定の浅ましいこの私に、愛想もつかさず、あきれもせず、根気まげもせずして、引つ張つて居られる如来の、その広大な思召にこつちがあきれるようになる。そこで、その時、思はず知らず吾々は引つ張つて自分の手の力を緩めるが、弥陀は力を緩めず、自分の手

元へズル／＼と引寄せられます。それが信仰です。

昨日も名古屋医大で一寸話をしましたが、詳しく申せば時間が足りませんから、ザツとお話申して置きます。この

「ひとえに親鸞一人がためなりけり」

と云うお言葉はどういうことかと申すに、私が嘗て六高の教授をして居りました頃に、信仰に遣りかけたい一人の学生がありました。これが京都の大学生になつてから、私の所へ訪ねて来て、

「弥陀の五劫思惟の願云々……あれは本当に読むとつくづく有難く思われますが、併しあのうちの、親鸞一人がためなりけり、とある。あれが私にはわかりません」

つまり、弥陀の本願は一切衆生のためではないか、だのに親鸞一人がためなりけりとある。あれはどういうわけか、あそこが分らぬと云う質問です。

私はこれを軽くあしらい

「あゝ、親鸞一人がためなりけりというのは、この私のためだということだよ」

と申しましたが、なか／＼そんなことでは承知しません。

「そうでないでしょう。一切衆生が目あてでしょう。一人だけが目あてということはどうもわかりません」  
と云う。

「つまり私のためと力強く言い現わす言葉のあやとして

親鸞一人がためだ、と言われたんだ。私は一体信仰は一般的に聴いている間は駄目だと思う。私がここで話をするにしても、私は一般的普遍的に話しても、あなた方は一般的話だとして聴き、大勢の人のために話をしてい、自分もその中に混つて聴いているというのでは駄目で、私のためだ、と自分を引付けて聴かなくてはならぬ。そこが親鸞一人がためなりけりというのだ」

と、そうした気持の話をしましたところ、その学生は得心して帰りました。

はじめいろ／＼と説明しましたが、相手が服しない。相手のみではありません。自分もスツカリわかつて居らぬ。何だか痒いところへ手が届かぬような感じがある。その時に私の考えの出発点となつたのがこれです。

「一切の衆生ことなれる苦を受くるも

悉くこれ如来一人の苦なり。」

私が今、あなた方に向い、あなた方が私の話を聴かれる以上、あなた方は信仰を求めていられるに違いない。信仰を求めていられる以上、何か心に不足のところがあり、満たされぬところがありましょう。大なり小なり苦があり、心配があるということが分る。併し誰にどういふ心配があるかと云うことはわかりません。

私を仮に如来とする。あなた方を衆生とする——如来

い、そして「子供は本当に可愛いものだな」と思う。

併し子供が可愛いから五人が可愛いのではない。子供が可愛いから長男次男三男、長女次女が可愛いのではない。五人の子が同じように可愛いのはそれが皆私の子であるからである。して見ると子は可愛いものだとということになる。

単に子は可愛いものだという時は、現実の事実から抽象化して来た道理理屈で、現実の子はあれもこれも同じように可愛い。あれと私とは親子だ、して見ると子は可愛いというのとは理屈ではない。

如来がその通りであります。

「悪罪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願」

と言えは、衆生を一纏ひとまとにしたのが如来のお慈悲のようにも考えられますが、如来対衆生の関係は、恰も私の五人の子供のその一々に対する関係と同じで、如来の念力、如来の哀みは、吾々衆生の一人一人の上に加わつていて下さるので、信の一念により「あゝ、そうでしたか」と衆生のあらん限りの念おもいが、丁度傘の骨のように、如来の方に向つて注がれるとき「い」も助かり「ろはにほへ」とも同一に助かるのであります。

如来と衆生との関係が、一人々々の関係である以上、私の苦勞は如来の苦勞である。で、私が救われるということが何よりで、如来は私の救済が唯一の目あてであります。

と衆生との関係はそんなものではありませんが——衆生がここに居るが、皆それ／＼の苦勞を持合せている、可哀想なものだな……と、あなた方一人一人の具体的現実の苦が、一々如来の心にひびく。衆生と如来との関係は、あなた方の苦を寄せ集めて、如来がそれを目覚めけて居られるので、あなた方の苦を寄せ集めている現実に、如来の心が来ているのでございます。

例えば、「いろはにほへ」と云う衆生がここにあり、「甲乙丙丁……」と云うような衆生の苦しみがあるとすると、衆生対如来の関係は、その衆生を一纏ひとまとにしたものと如来と対立しているかというに、そうでない。「い」には「甲」の苦しみがあり「ろ」には「乙」の苦しみがある。「は」には「丙」の苦しみがあるとすると。その現実の「いろは」に「甲乙丙」の苦しみが各々あれば、その一人一人の苦しみが如来の心にピシ／＼とひびくのでございます。

その関係を親子について見ますと、私には五人の子供がある。その子供は長男も次男も三男も可愛い、長女も次女も可愛い。皆同じように可愛い。だから、長男にいま何か心配があれば、その心配が、そのまま私にひびく。「あいつ、こう云うことを心配しているな」と。長女が何かクヨ／＼して居れば「あゝ、云うことをあれは思っているな」と私に響いて来ます。このように、五人が五人ながら可愛い

他の者がどんなに救済されましたも、私一人がそれに漏れるということなれば、如来は正覚が取れぬのでありますから、どこまでも、この私一人を救済されなければなりません。ここに親鸞一人がためなりけりと云うことになるので全くそれに相違ありません。

それで、お説教や講話を聴く時にでも、みんなと一緒に聴いて居るんだ。蔭の方で樂をして聴いて居ればよいと云うような、そんな聴き方をしているは到底信仰は得られません。如来は私一人を直接のお目あてであると思わねば駄目です。他人のためではない、この池山のためである、という風に、

「弥陀の五劫思推の願をよく／＼案ずれば、ひとえに私一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」  
と、繰返し／＼唱うれば、それによつて本當の念仏が出るようになりませう。

信の一念で、この世を果てるまでしみこみが伝わり、言葉と信仰の宗教から、心と行の宗教にならねば本當でないと思ひます。今日はこれだけ申上げて置きます。

昭和五年六月二十二日、日曜講話記。

## あとがき

池山先生のお好きだった白萩が庭前にも今を盛りと咲き乱れて、先生の御忌日の前ふれをして居ります。本月は先生の特集号といたしました。しつかりと先生の御声をききとつて下さいますように。

### 御案内

十月廿八日(日)午後一時。

一 道会法要 並に 談話会

京都市右京区山田開町 浄住寺。

京都駅、苔寺行きバス、終点下車、南入ル。

新京阪、桂駅乗り換え、上桂下車、西入ル。

今年、先生の御長男、池山寿夫様も御出席下さることになりました。寿夫様は、筆者より六高の五年先輩で、すでに六十をいくつか過ぎられて、晩年の先生の面影とお声がそっくりなので、びつくりいたしました。先生の廿三回忌の慈光誌へ、「犬と萩と」を御執筆下さったので、御存じの方も多しと思ひます。

本年九月に名古屋に移られまして、中南米の貿易商社の責任者となられました。戦前は南米のベルーで邦字新聞を発行していられたが、日米開戦と同時に交換船で帰国され、戦後は四国の山奥に開拓団に入られて七ヶ年、その後高知で亜炭鉱を経営して居られました。

「戦前、戦後を通じて、たのまるただ念仏の我にありざるべき業はさもあらばあれ、の一つで生きて来ました」

との御述懐、先生の遺されました無上の宝珠をそのままに受け継いでいられることの有難さ、尊さ、感無量であります。

思えば今年は私にとりまして不思議な年でありました。と申しますのも本年春は、北海道の芦別鉱山で活躍して下さった近角眞鶴様が東京本社に職業部長としてお帰りになり、名古屋の草庵をお訪ね下さいました。今秋は寿夫様が名古屋に移り住んで下さるようになり、近角、池山の両先生の御縁の不思議さに覚えず憐を正さしめられます。

榊原様に早速報告いたしますと

「御朗報拝読、早速先生の御影前に報告、拈香合掌しました。今秋の一道会は海に先王催とでも申さねばあらわし得ない時機当来の会となりました。有難い還相であります。…先王廿五回忌を四半世紀と遠く感じたことも忽然として再誕の近似感と急転しました。お念仏より外に申しようがありません。」

### 御案内

△毎月第一、二、三日曜午後一時半、南区駮上町二。一道会例会。

△毎月、廿四日、午前、午後、教西寺法話会。昭和区小坂町。市電御器所道下車。

定 価 一 部 二 十 五 円 ( 送 共 )

半 年 百 五 十 円 ( 送 共 )

一 年 三 百 円 ( 送 共 )

名古屋市南区駮上町二ノ八八

編集・発行人 花 田 正 夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駮上町二ノ八八

発行 所 慈 光 社  
振替口座名古屋一〇四七〇番